

## 若狭町でフォーラムと宝の道

### ふくいユネスコフォーラム2023

(公財)日本ユネスコ協会連盟が主催する「プロジェクト未来遺産2022」に、若狭三方縄文博物館友の会DOKIDOKI会が登録されました。それを受けて、20年に渡り地道に活動を続けてこられたDOKIDOKI会と一緒に、「貴重な自然・文化遺産の未来について真剣に考え、継承していく手法を学ぼう」と、フォーラムを開催しました。

会場には、DOKIDOKI会会員10名、ふくいユネスコ協会会員22名、ほか関係者・一般参加者も含め、50名以上の熱心な参加者が集いました。

光野稔会長の挨拶に続き、若狭町二本松正広副町長のご挨拶、そして、普段はご夫婦で農業を営んでおられるDOKIDOKI会の松村光洋会長から、発足のきっかけ(2000年に若狭三方縄文博物館オープン後、2003年の縄文シティサミット開催に向け設立)や、会の目的(地域の文化・歴史・自然・環境などを学び、守り、そして次世代へ継承していくこと)を聞くことができ、私たち協会の目指すテーマと重なることもあって興味深く聞き入りました。



山口容子副会長は、丸木舟乗船体験や縄文体験キャンプ、縄文講演会など、これまでの活動状況の報告がありました。特に20周年イベントについては、縄文杉でのグッズ作りや勾玉作り、弓矢体験、実際に煮炊き出来る縄文土器を作ろう!など、参加者に体験型のイベントで楽しんでもらい、同時にDOKIDOKI会の趣旨を理解し、参画してもらえるような事業を展開してきたと述べられました。また、具体的に6つの部会(縄文の森づくり・くすりやさ



ん部会、縄文杉グッズ部会、縄文学研究部会、縄文食部会、アングイン部会、広報部会)の今後の活動についても聞くことができ、どの部会も模索しながらも楽しんで活動されていることが分かりました。

今後も「止まることなく、ふる里若狭・縄文博物館と共にDOKIDOKI会の活動の輪を広げていく。そして後世に繋いでいきたい。」と熱弁され、その熱意に心打たれました。

ふくいユネスコ協会からも、市橋真紀部会長から、ユネスコ憲章をもとに20年間のこれまでの活動(ユネスコスクール・世界遺産スタディツアー・地域遺産宝の道ウォーキング・SDGs活動・世界寺子屋運動・チャリティー茶会・フォーラムの開催など)を報告し、DOKIDOKI会の会員や一般参加者に理解を求めました。

いくつかの質疑応答の後、参加者全員で「故郷」の歌を♪ブイボ カレリ アノダマ……♪と縄文語で歌い、みんなで、「頑張ろう!握手」をして閉会しました。

(記・東 隆代)



## 宝の道

今年の宝の道は11月25日(土)に縄文ロマンを求めて若狭町を訪ねました。私たち一行を案内してくれたのは、DOKIDOKI会縄文学部会長の山本和夫さん。まず最初は、



縄文博物館の敷地内にある3棟の竪穴式住居へ。この日はちょうど月1回の火焚きということでDOKIDOKI会の方が住居内の囲炉裏で火を起こして燻蒸を行っていました。煙や煤で湿気対策や虫退治、建物全体を強くする作業だということです。

次に向かったのは三方湖畔西田地区北庄の舟小屋。この

地区は明治・大正時代は交通の便が悪く湖を渡る舟が他の地区との交流の手段で、特に梅の時期は美浜まで舟で運び大八車に積み替えて敦賀まで行商に行っていたとのこと。その後道路整備が進み、昭和30年代までは50棟あった舟小屋も現在は北庄地区に6棟、伊良積地区に4棟の合わせて10棟が観光資源として保存されてお



り、地区の皆さんが保存グループを結成し保存・改修を行っています。

続いて縄文太郎が見守る鳥浜貝塚へ。鳥浜貝塚は1961年の護岸工事の際に発見さ



れた鱒川と高瀬川の合流地点を中心に広がる低湿地遺跡で、1962年から85年まで10次にわたる発掘調査が行われました。調査では、石器や木器、編み物、縄、織

維製品、漆器、丸木舟、貝殻、種子などが出土し、縄文博物館に収蔵され展示されています。また出土物からはこの地区の縄文時代は7000年近く続いていたと推定されるということです。

ここから再び縄文博物館へ。館内には、縄文時代前期の(約6200~5700年前)のスギの大株、縄文土器を紹介する土器のみち、復元された丸木舟、鳥浜貝塚の出土遺物を中心に縄文時代の木器文化、縄の文化、衣の文化、漆技術や鳥浜村の春夏秋冬の生活紹介コーナーなどで縄文時代の人々の生活やその技術の高さを知ることが出来ます。縄

文を知ること  
縄文の生活が出来  
るわけではあり  
ませんが私たち  
が生きている  
時代を見つめな  
おすことは出来  
ると感じました。

(記・伊藤貴夫)



## 中部西ブロック ユネスコ活動研究会

2023年度中部西ブロックユネスコ活動研究会は、10月7日(土)に三重県津市で開催されました。大会テーマは「国連が定めた持続可能な開発目標SDGsを地域ユネスコで考えよう」～地域のたからものを未来の子どもたちに～でした。大会は、基調講演に続いて事例発表が行われ、菰野ユネスコ協会が「学校・地域との連携」。玉城町立田丸小学校の倉野雅文さんが「書き損じはがき回収について」。富山ユネスコ協会の牧野宇子さんが「富山ESD推進プロジェクト」についてそれぞれ発表しました。この中で田丸小学校の倉野さんは「たまたま今年度の児童会役員選挙立候補者の中に、国際問題への取り組みを公約

に掲げた児童がいたことからこれ幸いと書き損じはがき回収を提案したそうです。役員の児童は倉野さんからのアドバイスも受けながらパワーポイントで資料を作り全校集会で発表、学校掲示板や児童会だよりでも取り組みを紹介し7月6日から14日ではがきを回収。今回の取り組みでは379枚のはがきが回収されました。この期間の回収としてはよく集まったと思う。子どもたちが想像以上にとっても広い目を持っていることや取り組みへの積極性を改めて感じました」と結びました。大会は事例発表に続いて活動報告が行われ、最後に次年度開催地の富山ユネスコ協会の挨拶があり大会を終了しました。なお11月28日に福井市の武道館で開かれた福井市の小中合同校長会で玉城町立田丸小学校の取り組みや勝山市のユネスコスクールには小型の回収ボックスをおいてもらっているなどの事例を紹介し、ハガキ回収事業について理解と協力をお願いするとともに、小型の回収ボックス20個を預けてきました。

# 第3回 ふくいユネスコスクール 交流会

第3回ふくいユネスコスクール交流会が2月16日(金)に今回もリモートで開催されました。参加者は47名でした。交流会では、三重県玉城市立田丸小学校の倉野雅文先生、勝山市立村岡小学校の児童の皆さん、坂井市立鳴鹿小学校の山田俊行校長先生、北陸ESD推進コンソーシアムの池端弘久さんが事例発表を行いました。



田丸小学校の倉野先生は『書き損じハガキ回収の取組』について発表しました。田丸小学校では児童会役員選挙立候補者の一人が国際問題への取組を選挙公約に取り上げたことから、全校集会で書き損じハガキ回収の目的などを説明、その後廊下にポスターを張り児童会便りで知らせ、保護者にも説明するなどして周知をはかった結果、10日間で379枚のハガキが集まりました。倉野さんは「児童たちは本当に積極的に取組んでくれました。この取組を今後は様々な機会を利用して働きかけ広げていきたい」と発表しました。



村岡小学校の児童は『未来へ残してつなげよう！村岡の宝～ミチノクフクジュソウ保全活動を通して』と題して発表しました。「保全活動では“ミチノクフクジ

ュソウ”についての生態や、なぜ守らなければいけないのか等を知り・理解することから始まり、活動を通じて自然とのつながり・地域とのつながり・人とのつながりの大切さを知りました。学んだことをこれからも守り・楽しみ・つなげようと思いました。」と結びました。



鳴鹿小学校の山田先生は『鳴鹿SDGs～地域との連携～鳴鹿小学校におけるESDの取組の現状と課題』と題して発表しました。鳴鹿小学校は2010年に福井県初のユネスコスクールに認定されました。歴史ある地域としての特徴を生かし、学年ごとにテーマを設け11月の『まほろばフェスティバル』で発表しました。実践にあたっては地域との連携が欠かせないことから、今年度の5年生は米作り・しめ縄づくり・そば打ち体験などを実施しました。「地域との連携の大切さ、どうしたら協力してもらえるか。児童たちにそのことの必要性をどう伝え理解してもらえるか。児童たちが積極的に楽しんで学んでもらえるか」など、取組や課題について発表しました。

北陸ESDコンソーシアムの池端弘久さんは「北陸ESDの現状と新たな一歩」のテーマで発表しました。

最後に福井大学教職大学院特任教授の三田村彰さんが「子どもたちの考えや思いを見つけてあげる事が大事。子どもたちが活動を通じてなにを学んだのか。次の学年にどうつないでいくのか。子どもが変わるには大人が変わらなければならない。子どもも変わり教師も変わる中で持続可能な学びを長いスパンの中でどう展開するか」などの講評があって交流会を終えました。

# 交流会に参加した 皆さんからの 感想です



福井大学教職大学院  
三田村 彰

交流会に参加した感想です。最初に、三重県玉城町立田丸小学校の実践事例です。児童会の役員選挙に立候補した児童が「私が当選したら、国際問題への取組を行っていきます。」という選挙公約をしたそうです。教師はこの児童の発言を見逃さず、児童会の主体的な取組として「書き損じハガキ回収」という児童の身近な問題から国際的な問題につながる活動を展開していく様子が伝わってきました。次に、勝山市立村岡小学校の実践事例です。校区のミチノクフクジュソウの保全活動について、地域社会と連携した児童の主体的な活動の様子が伝わってきました。この事例からは、児

童の活動が植物の保全から始まり、地域社会の伝統的な生活を体験することにより、自然とともに生きることの意味を理解することに発展していくプロセスを学ぶことが出来ました。

最後に、坂井市立鳴鹿小学校の実践事例です。全学年を通して行われる「まほろば学習」で、育てたい資質能力を明確化し、学校全体でカリキュラムをマネジメントすることにより、児童の継続的な活動を教師や地域住民が効果的に支援することが可能になっていることがわかりました。今回事例発表していただきました三つの学校の皆さん、北陸地区のESDに関する情報を提供していただきました北陸ESDコンソーシアムの皆さんに感謝申し上げます。



勝山市立北郷小学校  
加藤 園己

3校の発表はそれぞれの学校独自の学習が展開され素晴らしいものでした。学習活動が広がりのあるものになるよう、三重県の全校集会での依頼の方法は参考になりました。村岡小の小原プロジェクトの方の協力を得た学習は、体験活動の広がりはとても魅力的でした。鳴鹿小の米作り学習は、米を作ることからもち作りへ、しめ縄作りへと米は捨てる場所がないものだ実感しました。また地域の活動が活発になるというのは、想像しませんでした。学校が元気に活動することで、地域も元気になることもあるとわかりました。池端氏の北陸ESDの現状と新たな一歩については、SDGsを達成するまでにあと7年ということを知りびっくりしました。もっと深まりのある学習を進めていけるよう先生方に紹介していきたいと思います。



勝山市立村岡小学校  
廣瀬 健介

各地域、学校ごとにESDの題材はたくさん転がっており、それらに気付いきかに題材として扱い、児童・生徒主体の活動にしていけるかがカギであることが改めて分かった。目新しいことをしなくても継承していくことも大事。そのときの児童・生徒の関心や考えに合わせ変化させていくことも大事。「活動」をすることが目的となってしまう、本来の目標から遠ざからないように発信を通して確かめたり、現職教育などでセルフチェックや研鑽をしていく必要がある。教科横断型にすることで時間削減につながったり、計画的な活動もできそう。ESDだけでなく人によって得意、不得意、熱意の差があることで生じる児童・生徒の学びの保障はやはり課題だと思った。



勝山南部中学校  
南保 勝人

○三重県書き損じハガキの取り組み 「生徒主体」、「宣伝」に特に力を入れていた。7月にも関わらず400枚弱のがきが集まったので事前の準備があったからこそだと思います。正月明けの結果もぜひ教えてほしいです。

○勝山市立村岡小学校 タイムリーな絶滅危惧種に焦点をあてたことで、児童の主体性に繋がったと思う。何より、今回の発表が生徒で実施されたことが素晴らしい。さらに表情などしっかりと指導されていることが伝わりました。

た。下準備など大変であったと思うが、児童を育てようとする思いが伝わりました。

○坂井市立鳴鹿小学校 ESD活動において、地域と深く連携することが大切であることがわかる発表であった。また、以下の点が素晴らしかった。①各学年の取り組みがはっきりしていること②つけたい力(評価)が設定されていること③発表の場(フェスティバル・フェスタ)を設けていること④地元とのつながりが深いこと(餅つきやしめ縄など、地元のみなさんが児童をみんなで育てていることが容易に想像できます。)



勝山市立鹿谷小学校  
大塚 雅洋

**田丸小学校** 児童会の役員選挙で掲げた公約を取り上げたことで、公約を宣言した児童はもちろんのこと、全校児童が自分事としての意識を持たせることができていた。学習活動や特別活動で、教員が子どもたちの意見を拾い上げていくことの大切さを再認識できた。

**村岡小学校** ミチノクフクジュソウの取り組みが長く続いている背景(1年間だけの活動ではなく、6年生から5年生へのバトンタッチ)を知ることができてよかった。教科であれ、総合的な学習であれ、子どもの興味関心が持続する課題を設定する(提示する)ことの大切さを感じた。

**鳴鹿小学校** 「鳴鹿の子どもは鳴鹿の宝」という意識をもち、地域と学校が強く連携して活動を行っているという印象を受けた。鳴鹿小では子どもに身につけさせたい力を5つのEで表していた。ベースはESDで身につけさせたい7つの力・態度よりもイメージがつかみやすいと感じた。



勝山市立荒土小学校  
松井 こそえ

県外でも県内でもそれぞれの学校で取り組んでいることは、似ていることも多く、少し視点を変えたり、広げたり、児童生徒主体にできるとよりよい活動になっていくと感じました。ただ、自校での取り組みにとどまることが多く、他校や他県、他国との交流に広げることがなかなかできていなかったので、私自身、今回交流会に参加させていただくことで、外に目を向ける機会となりました。いろいろなやり方があること、いろいろな協力機関などがあることを知り、それぞれの学校で、持続可能な意義ある実践をしていけたらと思いました。



勝山市教育委員会  
廣田 大吾

2年振りの開催であったが、定期的に県内外のESDの取り組みについて交流することは大切であると感じた。勝山市の各小中学校における実践は、地域を知り、地域の良さを発信し、未来につなげていこうとする取り組みが中心であるが、ローカルのつながりがしっかりしているからこそ展開できる活動である。今後は地域だけでなく、どのように世界にひろげていくかが大きな課題であると感じた。市教育委員会として、児童生徒が持続可能な社会を築いていくためにチャレンジしたい気持ちを育ててもらえるよう支援を継続していきたい。



坂井市立鳴鹿小学校  
山田 俊行

今回、このような機会を与えていただき、実践をまとめることで自分の振り返りになりました。池端先生のお話の中にもあった、予定調和になりがちのことやマクロとミクロのバランス、教科のESDなど、自分の中のものもやしている部分が明らかにもなりました。内容的には、かなり省略しての発表となってしまう、十分に伝わらなかったのではないかと思います。



坂井市教育委員会参加者一同

なかなか時間をとって今回のようなお話を聞かせてもらう機会がなくなっているので、参加させて頂いてよかったと思いました。

○どの学校の取り組みも子どもの声を大事にしており、それをうまく先生(学校)、地域がコーディネートしながら学習を進めていっていると感じました。ESDの取り組みが地域に根ざした学習と結びつき、子どもたちの興味関心に沿うものになっていることに感心しました。

○坂井市ではどの学校も地域と進める体験事業に取り組んでいます。教師や子ども、地域がESDやSDG sの視点を意識し、どう価値付けするかで子どもたちの成長は異なってきます。ESDはそれらの活動や学びが環境や世界とどのように結びついているのかを、子どもたちに示すことができるものだと感じました。幼児教育においても、遊びの中で子

どもたちにどんな力を身につけてほしいのかを考え、興味関心の芽を育てていきたいと思いました。

○SDG sが一気に広がったこともあり、ESDとは何か、SDG sとの違いは何かと思う教員は多いです。しかし、実際に総合的な学習の時間でSDG sに取り組むと、児童生徒から出てくる問いや課題はESDに収束していくと感じていました。ESDは新たに増やすものではなく、いま現在学校で行われていることを、ESDとして価値付けしていくことが大事だと思います。

○ESDへの理解を広めるためには、教育委員会や教育研究所が協力して教員研修に組み込んだり、教員養成大学での講義・演習として定着させたりすることが求められると思います。未来を生きる子どもたちのために、現在大人たちができることを「Think globally, act locally.」しなければという思いを強くしました。



三重県教育委員会事務局社会教育・  
中井 雄一 文化財保護課社会教育班主任

ユネスコスクールの活動というだけあって、地域の自然や文化に根差した活動を行っている姿に感服しました。村岡小の取組では、子どもたちの生き生きとした発表があり、郷土愛が感じられました。各学年の段階に応じた学習の取組や異学年間での引継ぎなど仕掛けも充実しており、学びの連続性に目を向けたカリキュラム作りがなされているなと感じます。鳴鹿小の取組では、地域の歴史を大切に、そ

の上で新しいものとの融合を図っていくというまちづくりのスタイルは一つのロールモデルであると思います。地域の人材や自然を生かしての総合的な学習の時間(?)や卒業証書、コサージュの取組など、他地域でも参考になるのではないかと感じます。5つのEというのも、目当てがわかりやすく個人的には好きな示し方です。地域学校協働活動が全国的に推進されている昨今において、かなり先進的な取り組みをしている地域なのではないかと思います。

# 第3回 ふくいユネスコスクール交流会



ヤマト運輸福井主管支店 サステナアンバサダー  
大下 元貴

三重県田丸小学校の、世界には読み書きしたくてもできない人がたくさんいることを知り国際問題に向けて取り組んだり、鳴鹿小学校や村岡小学校のように地域の方と共にSDGsに取り組む発表を聞き自身の見聞を広げられる良い経験になりました。サクラマスの孵化が地球温暖化、水面上昇により失敗していることを

知り、ヤマト運輸での様々なCO<sub>2</sub>排出量を減らす自分たちの活動で力になれるかもしれないと考えたりしました。ヤマト運輸でも子供たちにSDGsについてより深く知ってもらうための環境教室出前授業を福井県の全小学校で開催する計画を進めています。ふくいユネスコ協会様ともヤマト運輸として共に環境という大きな問題に取り組んでいきたいと思っております。

## 減災教育プログラム この一年の取り組み

防災  
教育

防災  
意識

防災  
対策

この度、1月の能登半島地震により被災された皆さま、ならびにそのご家族の皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

本校で防災教育を本格的にスタートさせてから1年が経とうとしています。2回の体育館での避難所設営や、定期的な異学年交流を通して、災害対策を「他人事」ではなく「自分事」としてとらえ、高校生が自ら考えたテーマに基づき、各々の活動を行いました。



また第33回福井県産業教育フェア研究発表部門では「防災対策について～福井南高校が避難所として機能するには～」をテーマに全国から集まった高校生に取り組みを伝えることができました。本校教員も、教職員研修や校内勉強会を通して、防災教育の質を高め、2月上旬に東京で行われた第10回アクサユネスコ協会減災教育プログラム活動報告会に参加し、本校の取り組みを発表しました。

防災教育を通じて、理屈や頭では分かっていたことが、実際に行動してみることで、事前準備の大切さを実感し、防災意識をさらに高めることができました。今後も継続して生徒・教職員一同、防災対策に取り組んでいきます。

福井南高校 夏目恵実

## 寺子屋部会便り



皆さんからのご協力で、本年度は **1,438枚** の書き損じハガキ (切手に交換して **78,546円**) を日本ユネスコ協会に送りました。本当に有難うございました。今回は、勝山市ユネスコスクール、鯖江市図書館文化の館、越前市中央図書館、福井市のみどり図書館・桜木図書館、福井県立図書館、福井市岡保小学校PTA、ユネスコ会員の皆さんにご協力を頂きました。これからもご協力をお願いします。



## 2024年度 行事予定

- 5月8日 福井ユネスコ協会総会
- 5月 田んぼファンクラブ(～10月)
- 9月 宝の道
- 10月19日 中部西ブロック活動研究会(富山市)
- 10月 ユネスコフォーラム
- 11月23日 全国大会(愛媛県新居浜市)
- (25年)1月 新年会
- (25年)2月 ふくいユネスコスクール交流会



ふくいユネスコ協会

910-0003 福井市松本4丁目8-4 生涯学習課分室内 TEL&FAX 0776-22-8181  
E-mail fukuiunescoasnjapan@white.plala.or.jp